

「サッカーユース審判員の育成 2017 広島」

広島学院高等学校

中 間 哲 也

1 はじめに

このレポートは、2014年に広島市立基町高等学校教諭の辻村俊司先生によって発表された「サッカーユース審判の育成について」にその後の3年のデータを加え、若干の考察を付け加えたものであることをお断りしておきます。

(公財)日本サッカー協会(以下、JFA)は2002年より、「普及」と「強化」の両輪を柱とした日本サッカーの基盤確立のため、またサッカーに携わるあらゆる人々が幸せになれる組織作りを目指して、11項目のJFAプレジデント・ミッションを掲げ、さまざまな改革をおこなってきました。2005年宣言では「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する」という理念を掲げています。2015-2022中期計画でもこれは引き継がれています。広島県高体連サッカー専門部においても、JFAの活動方針を承け、県大会や地区大会、県ユースリーグではリーグ戦化の整備を安全健康面からの適切な試合数も考慮しながら活動計画を進めてきました。その結果、年間の試合数は1000試合余りとなってきています。一方で、顧問・指導者の不足や教員の審判員の確保が難しいといった問題も出てきました。かつて、JFAは2005年の全国高校サッカー選手権都道府県大会で、無資格者が審判を務めていた問題で、登録審判員以外には公式試合の審判を認めず、反した場合は試合を無効とするとの通達を同年12月に出しました。これを契機に、広島県高体連サッカー専門部では、まずは登録審判員の確保をはかり、自主運営できる組織を目指していかないといずれ大会運営に支障をきたすという強い危機感を抱き、自主運営できる組織の一つとして審判員の育成を図り現在に至っています。そして、これは今後もさらに継続して将来的にわたって取り組むべき問題です。そこで、ユース(高校生)年代における試合数と審判員の現状、及びこれまで行ってきたユース審判員育成・普及に関する取り組みの内容とその成果や課題について述べてみます。

2 ユース(高校生)年代における試合数と審判員の現状

(1) 試合数の現状

表1 JFAプレジデント・ミッション

1	JFAメンバーシップ制度の推進	7	フットサルの普及推進
2	JFAグリーンプロジェクトの推進	8	リーグ戦の推進と競技会の整備・充実
3	JFAキッズプログラムの推進	9	地域/都道府県協会の活性化
4	中学生年代の活性化	10	中長期展望に立った方針策定と提言
5	エリート養成システムの確立	11	スポーツマネジメントの強化
6	女子サッカーの活性化		

表1の第8項「リーグ戦の推進と競技会の整備・充実」では、多くのプレーヤーが、それぞれの年代、レベル別に応じた環境で、年間を通じてプレー機会が提供されるよう「Players First」を念頭におき、競技会の整備に努めるとある。また、2種(高校生)・3種(中学生)年代において積極的に推進してきた「都道府県リーグ」等を通じて、リーグ戦文化の更なる浸透を目指すとされている。現在、公式大会には、広島県高体連サッカー専門部主催・共催の大会と協会主催の県ユースリーグがある。県ユースリーグは、各カテゴリーにおけるリーグ戦の新設により、1つの学校からトップチームのみならず、BチームやCチームなど複数チームの参加も認められている。したがって、各学校の試合数は以前に比べて格段に増加しており、ほぼ年間を通じて絶えず何らかの公式試合を行っているという現状にある。これらの大会を年間スケジュールで表すと図1のようになる。2016年の各公式大会の内訳をもとに、試合数を算出してみると、1027試合であることがわかる。大会参加チーム数の増減により試合数の違いはあるが、ここ3年間を見ると今後も年間1000試合前後の間で実施されることになると考えられる。

図1 広島県高校サッカー一年間の流れ

月	高体連サッカー専門部主催大会	(公財) 日本サッカー協会主催大会	
3	(Lはリーグ戦、Tはトーナメント戦の略)		
4	県総体地区予選 (L)		
5			
6	県総体 (T)、		
7	中国選手権大会 (T)		
8			
9	県選手権大会一次トーナメント (T)		
10	県選手権大会二次リーグ (L)		
11	県選手権大会決勝トーナメント (T)		
12			
1	県新人大会 (T)		通年によるホーム&アウェイ 前後期
2	県新人大会 (T)		
3	中国新人大会 (T)		

	高体連主催試合(県・地区)	協会主催試合	計
2012	342	578	920
2013	338	612	950
2014	339	618	956
2015	328	618	946
2016	343	684	1027
2017	348	699	1047

2017 高体連主催県大会

- ・ 県総体 県31 地区118 計149試合
- ・ 県選手権大会 一次T81 二次L24 決勝トーナメント7 計 112試合
- ・ 県高校サッカー新人大会・・・87試合

協会主催大会

- ・ 高円宮杯U-18サッカーリーグ2017 HiFAアドバンスリーグ 1部～4部 699試合

(2) 審判員の現状

①審判員登録制度

審判員の登録制度は、JFA基本規程において規定されており、公式試合は登録審判員が行うといった内容も記述されている。つまり、試合数の数だけ審判員が必要であり、(1)で述べたように公式大会の数が増えることで割り当てられる審判員も増加している昨今、試合に割り当て可能な審判員の育成は急務であると考えられる。審判員の資格の種類については表2の通りで、高体連サッカー専門部加盟校に登録されている指導者(部長・監督・コーチ)と高校生で、JFAに登録している審判資格登録者数と資格の内訳は2017年5月末時点で、広島県指導者の合計は153名(1級なし、2級23名、3級73名、4級57名)、高校生は2310名(2級1名、3級17名、4級2292名)である。

表2 審判資格の種類

主催者	(公財) 日本サッカー協会		地域サッカー協会		都道府県サッカー協会		地区サッカー協会	
	主審	副審	主審	副審	主審	副審	主審	副審
1級	○	○	○	○	○	○	○	○
2級		※	○	○	○	○	○	○
3級				※	○	○	○	○
4級					※	○	○	○

注：○印は担当出来る事を、※印は特に優れていると審判委員会が認めた場合に担当できる事を表す。
地域サッカー協会とは、北海道・東北・関東・北信越・東海・関西・中国・四国・九州の9地域協会をさす

②ユース審判員の割り当て状況

表2を見ると、3級審判員と4級審判員が県内の大会を担当することができる。2016年の公式大会において、高校生がどのくらい審判の割り当てがあったか延べ人数を概算してみた。高体連主催の大会では約400名、協会主催のユースリーグは約1400名が担当している。トーナメント戦の準々決勝（ベスト8）以降の試合を除き、もはやユース審判員が公式試合で審判をすることは当たり前となってきている。

(3) 審判資格取得について

JFAが認定する審判員資格認定講習会の受験資格（参加できる者）は、表3の通りである。また、標準カリキュラムとして、4級審判員認定講習会では、審判員制度・競技規則・基本的審判法（実技も可能）・競技規則確認テスト等、合計5時間30分の講義をすべて受講すれば資格認定される。3級審判員認定講習会では、県協会主催の一次試験で3級審判員として求められる資質と能力（競技規則の正しい適用と解釈、体力等）について1時間30分の講義と、競技規則テスト・体力テストが課せられており、すべてに合格した者が二次試験（主審実技）を受験することができる。二次試験は、アドバンスリーグや各種フェスティバル形式の試合等を利用して高体連サッカー専門部所属の指導資格を持った審判インストラクターが指導及び評価を行い、一定の評価基準をクリアすれば合格となり、県審判委員会です承されると資格認定される。

表3 審判員の受験資格

	受験資格（参加できる者）	窓口
1級	2級取得後2年以上で、実績のある34歳以下の者（受験年の4月1日現在）	日本サッカー協会
2級	3級取得者で一定の実績を積んだ者（高校生も可）	地域サッカー協会
3級	4級取得者で一定の実績のある満12歳以上の者	都道府県サッカー協会
4級	満12歳以上で心身ともに健康な者	都道府県サッカー協会

3 ユース審判員の育成

(1) 認定講習会

①4級審判講習会

(公財) 広島県サッカー協会では年間を通じて多くの審判員資格取得講習会（以下、審判講習会）を開催している。高体連サッカー専門部としても、審判員としてのスタートラインとなる4級審判講習会は、今後の活動に大きな意味を持つととらえ、毎年県内各地で多くの高校生が受講出来るように講習会を計画している。多くの学校が趣旨を理解して、生徒への案内、会場提供、実技指導等の協力のおかげで、受講者数に反映している。大きなホールや講堂に集めて一斉講義形式で行うスタイル（他県は多い）も考えられるが、広島県の場合は、実技研修も組入れて細かく指導しているので、多くても最大100人から30人程度の規模で実施し、数多く講習会を設定しているのが特徴といえる「表4参照」。新規審判講習会は夏期と冬期におこ

なっており、夏期は5月から8月に実施し、審判資格を持っていない1年生が多く受講している。学校によっては、サッカーのルール学習の一環と位置づけ1年生部員全員に受講を働きかけている学校も多い。また、冬期は4月からの新シーズンに対応できるように、2月に実施している。更新講習会は、2008年よりJFAが導入したJFAラーニングというWEB講習を受講するように推奨している。インターネットに接続可能なパソコンを利用してWEB上で学習をおこなう形式で、時間の都合で集合形式の実地講習会に参加することが難しい高校生でも、同等の内容をパソコンとインターネットの環境があればいつでもどこでも受講することが可能である。ただし、そういう環境が整備されていない場合もあるので、表4の右側に示したように高体連サッカー専門部主催の実地による更新講習会も設定している。

表4 4級審判取得講習会受講状況

開催年	講習会回数	新規受講者数	更新受講者数
2014年夏	13回	776名	eラーニング受講者 867名 更新講習会 5回 223名
2014年冬	2回	119名	
2013年夏	13回	675名	eラーニング受講者 641名 更新講習会 5回 226名
2013年冬	2回	138名	
2012年夏	14回	879名	eラーニング受講者 578名 更新講習会 3回 140名
2012年冬	1回	102名	

②3級認定講習会（昇級テスト）

4級審判員としての実績があり、さらに上級を目指す意欲ある高校生が3級昇級テストにチャレンジしてきた。高体連サッカー専門部が独自に県トレセン対抗戦（年2回）の試合を利用して実技試験を実施していた2000年から2009年では、毎年最小4名から最大8名の高校生が3級昇級テストに合格していた。2日間の日程の中で競技規則テスト・体力テスト・実技試験（主審・副審）をカリキュラムとして、総合的に見て合否の判定をしていた。県協会主催の統一基準による一次・二次試験のスタイルが変わった2010年は10名、2011年は6名、2012年は7名、2013年は16名、2014年は30名が合格している。2009年までは受験機会が年2回（7月・12月）だったが、2010年以降、年間で最大5回に受験する機会が増えたこと、より上級を目指そうとする高校生が増えたこと、一次試験合格後、二次試験までの間にしっかり実技の練習が出来ることなど合格者が増えている要因といえる。過去9年間の3級・4級審判員のJFA登録者数は表5の通りで、2014年には4級審判員の登録者数が初めて2000人の大台に達した。

表5 ユース3級・4級審判員の登録者数

年度	2級	3級	4級
2014	0	30	2037
2015	1	37	2182
2016	1	27	2219
2017	1	17	2292

③登録者数が増えた背景

広島県に限らず、全国的に見てもユース審判員の登録者数は増加している。その背景には、昨今のサッカーを取り巻く環境が審判に対する見方や意識も変化していると感じる。1993年にプロリーグ（Jリーグ）が発足し、サッカーがプロ化されてきた。競技者を取りまく環境整備が進む中で競技レベルも格段に向上し、

今日では、日本代表がワールドカップ（以下、W杯）に出場するのは当たり前のように認識されている（1998年から5大会連続出場）。審判員についても同様に、技術レベルはめざましい進歩を遂げて、その地位も向上してきている。例えば、世界最高峰の大会であるW杯で審判を務めた近年日本の審判員の中でも、上川徹氏はドイツW杯では3位決定戦の主審を担当し、高い評価を受けた。西村雄一氏は、ブラジルW杯では開幕戦の主審を担当し、大会の判定基準を示す役割を担うだけにFIFAの評価が高かったことが伺える。ワールドクラスの競技者をジャッジできる審判員が輩出され、日本における審判レベルが向上した証といえる。また、Jリーグの発足によってサッカー選手のプロ化が行われていたが、これまでの審判員はすべての人がアマチュアで、主たる職業を持ちながら審判活動を両立させてきた。2002年にPR（プロフェッショナルレフリー）制度ができ、審判員にも少しずつプロ化の波が到来した。現在13名のPRがプロの審判員として活動している。また、2004年にはJFAレフリーカレッジが開校し、トップレベルのエリート審判員を育成しようという取り組みも行われている。これにより、子供達にとって、プロのサッカー選手を目指すという目標に加えて、プロの審判員を目指すという目標も選択肢に入るようになった。審判の地位の向上があり、社会的にもその重要性が認知されてきたからであると考えられる。加えて広島県には、高校の指導者で元国際主審でJリーグ担当主審だった松村和彦氏（広島県立工業高校教諭）や元国際副審でJリーグ担当副審だった江角直樹氏（廿日市高校教諭）の存在も大きいといえる。県内の同じ高校サッカー現場で活動しており、各大会の決勝戦ではトップレベルの審判姿を身近に見ることができた。多くの高校生にとっては憧れの存在であり、良いお手本となった。実際に生徒の中にも審判に対して興味を持ち、将来はJリーグで笛を吹きたいと言う者も出てきた。また、一方でユース審判員の育成という視点が各校の指導者に浸透し、生徒に受講を促すようになってきた。さらには、講習会を受講させることで、生徒にルールを理解をさせようとするチームや指導者が増えたこと、JFAが2010年より「ユース審判員の発掘・普及・育成」に力を入れて取り組むようになったこと、2012年から登録費が半額になったこと、最近では中学時代に資格を取得・更新した高校1年生が増えていることなどが、登録者数増加につながった要因であると考えられる。

（2）高体連サッカー専門部の取り組み

1998年より、将来的には高校生にも審判を任せることが出来るように、4級新規審判講習会や3級昇級テストを実施し、高校生の審判員を増やすことを地道に行ってきた。JFAは2010年よりユース年代を特化して、審判員の発掘・普及・育成に力を入れて取り組むようになった。この取り組みを都道府県サッカー協会審判委員会にも要請し、翌年より、広島県はユース審判員活性化プロジェクト会議を立ち上げて、種別の連携をとりながらユース審判員育成の取り組むべき課題をあげて検討をおこなっている。

① 構成メンバー（8名）

県協会審判委員長、県協会ユース審判員育成担当者、技術担当者（高校・中学校）、審判委員長（高校・中学校・小学校）、県協会大学審判担当者

② 会議の目的

- ・ユース審判員についての広島県の現状と今後の課題を把握する。
- ・ユース審判員育成や活動に関わる環境整備のための対策を考える。
- ・審判委員会、技術委員会と連携してユース審判員育成のための講習会・研修会を企画する。

③ 高体連サッカー専門部（審判委員会）としての取り組み

- ・4級新規審判講習会の計画立案（夏期・冬期）
- ・4級更新講習会の計画・立案
- ・3級昇級テスト（二次試験）の実施
- ・ユース審判員トレセンの計画立案（8月・12月・2月）～JFAよりユース審判員の育成強化策の方針を承けて、平和祈念3種トレセン対抗戦、県トレセン対抗戦U16・U17の試合を利用して主審・副審の審判実技研修会を実施

- ・フットボールフューチャープログラムへの3級審判員派遣（8月・御殿場市時之栖スポーツセンター）
- ・全日本少年サッカー大会へのユース3級審判員派遣（12月・鹿児島）
- ・中学校・小学校の大会へユース審判員の派遣および運営協力

このプロジェクト会議において、中学校や小学校の担当者と情報交換を進め、連携をとることで、中学校のユース審判員が増加（高校に資格を持った生徒が入学してくることにつながる）したり、中学校や小学校の大会にユース審判員を派遣して運営に協力することが出来るようになったり、また、大学担当者には3級審判資格を持った生徒の県内進学者の情報提供をして、進学後も審判員で即戦力として活躍できる道筋をつけるなど、少しずつではあるが種別を越えた連携による成果もみられる。また、これらの活動計画を整理して、高体連サッカー専門部審判委員会より県委員会（5月・11月）や顧問総会（2月）時に提示している。諸行事については、総務委員長に依頼し、加盟校へ一斉送信メールで詳細を案内するなど周知する体制をとっている。

4 成果と課題

（1）成果

成果は3つある。1つは、課題であった試合数の増加に対して、ユース審判員の確保により、自主運営が可能となったことである。高体連サッカー専門部主催の大会、協会主催のアドバンスリーグにおいて大会運営が容易になってきている。2つは、ユース審判員が公式試合で活動しているが、これまで大きなトラブルもなく今日に至っていることである。一番の理由は、高校生が選手同様に審判員として一生懸命取り組んでいることが大きい。また、ユース審判員への指導は各チームにお願いしているが、平素より顧問の指導がしっかりとなされているおかげと感じている。高体連サッカー専門部委員長がユース審判を育てていくためには、「一生懸命審判をしている高校生に対して、判定に対する異議や言動など不快な思いを大人が絶対にさせてはいけない。」と顧問総会や委員会等で常々呼びかけている。ユース審判を育成するうえで、とても重要なポイントであり、広島県では共通理解として浸透しているといえる。3つは、審判活動に興味を持ち、より上級を目指す生徒が増えてきたことである。高校時代に高体連サッカー専門部主催の4級・3級審判資格を取得し、卒業後JFAレフリーカレッジで1級審判資格取得後、2014年よりJ1担当主審となった池内明彦氏（城山北中学校教諭）のように育成のモデルケースが出来た。また、一昨年卒業した2名の生徒は、2級二次試験を卒業後に受験するなど、高校生の審判活動で終わらず上級審判員を目標とする意欲を示した。昨年は、高校3年時に2級審判資格を取得し、進学後も継続して審判活動をおこなっている者もいた。今年度は、昨年高校2年時に2級審判資格を取得し、宮城県で7月に開催された全国高等学校総合体育大会男子サッカー競技において2回戦、3回戦で副審を担当し、活躍した生徒もいる。（JFA ホームページ「JFA ニュース」で「平成29年度全国高等学校総合体育大会サッカー競技で高校生が審判を担当」8月21日付掲載）

（2）課題

現在考えられる課題として3つある。1つは、審判資格を持ったユース審判員に対して活躍できる場をいかに作っていくかという点である。せっかく審判資格を持ちながら、審判をあまり行わない生徒もいる。高校の試合で活動することはもちろんのこと、お世話になった出身中学校や小学校が参加する大会に審判として協力できる体制がとれないものか。高校のスケジュールが過密であったり、個々の状況にもよるが、活動できる場をさらに増やしていきたい。2つは、ユース審判員の審判技術をレベルアップする場をいかに作っていくかという点である。4級審判員の副審は各チームの指導に負うことが多い。年3回の審判トレセンでは、希望者に審判実技指導を行っているが、年間を通じてどれくらい強化の場に携われるか、審判インストラクターの指導者を増やす取り組みも併せて課題といえる。3つは、高校時代だけの審判活動に終わらさないために、資格を更新しやすくする必要がある。学年が上がる毎に更新者数が減り、卒業後はさらに減って

いる。受験等による物理的な問題で更新できず、失効する者も多い。各校に理解を求めるとともに、現在1年毎の更新制度となっているが、ユース審判員が高校在学中および卒業後もスムーズに継続して活動できる更新システムをJFA審判委員会普及部会に要望していきたい。

5 おわりに

試合数の増加による審判員の不足をどのように解決するかという現実的な問題から出発して、長い時間かけてユース審判員を増やす取り組みを進めてきた。選手である高校生は、ただ選手だけではなく、立場を替えて、審判をすることで様々な気づきがあり、視野を広げることにつながると思われる。大会を運営するには多くの人々に支えられ、各学校の協力の下に成り立っている。高校生も会場校の準備や後片付けのみならず、試合に欠かすことの出来ない審判を務めることにより、大会役員として力を発揮し、自主的な運営に携われる良い機会といえる。また、「サッカーの強い国の審判員はレベルが高い。」「良い審判員がフェアでたくましい選手を育てる。」と言われるように、良い審判員を育てることは、高校サッカーや日本のサッカー発展のためには、今後必要不可欠であると考えます。